

第5回 多様な学び実践研究フォーラム

2018年2月25日 午後の部

「海外先進事例を学ぶ」

金 敬玉(キム・キョンオク)

朝倉：それではお時間となりましたので、長かった、あるいは短かった2日間のフォーラムですが、いよいよ最後の全体会になります。

この全体会では、今までは国内のことで、みなさん日本の各地から集まってこられた方で、主にいろんな共有や議論をされていたかと思いますが、この全体会最後の時間では、海外先進事例から学ぶということで、このために韓国からオルタナティブスクールのネットワークを始まりから中心的にずっと進めてこられた。また、ご自身でもオルタナティブスクールをやってらっしゃるキム・キョンオクさんにお越しいただきました。

みなさんの資料では、56ページ、57ページにその資料が出ています。今回はオデッセイスクールとって、官と民と共同でやっているプロジェクトについて、日本ではまだ例を見ないような実践をなさってるんですね。

韓国では日本と同じような学歴社会もありますけれども、日本のような不登校と、不登校に相当する(不登校と)まったく同じ言葉は(韓国には)ないわけですが、そういう違いもあったり、フリースクールという言葉はあまり使ってらっしゃらない。オルタナティブスクールという言葉は代案学校という言葉を使ってやってらっしゃる。その中での実践のお話しになります。60分間お話をさせていただいて、その後ご質問等の時間を取るように流れは考えております。

それでは韓国からお見えの、キム・キョンオクさんよろしくお願ひします。

キム：みなさん、こんにちは。韓国から参りました。キムと申します。韓国語じゃなくて、日本語でやります。(本当は)韓国語でやりたいんですね(会場笑)。

みなさん疲れてないですか?(会場笑) 私、朝倉さんからこの時間にスピーチをするっていうことを頼まれて、それでプログラムを見たら、朝からずっとあるんですね。

それで「韓国ならみんな帰りますよ」っていう、そしたら朝倉さんは「日本人は一人も帰らないです」って(会場笑)。

本当に韓国人はお昼を食べてみんな帰ります(会場笑)。たぶんここにぼちぼちっているくらいじゃないかな。それなら安心なんだけど、ここには大勢いるからすごく緊張しますね(会場笑)。

でも、私はこういうふうに下手な日本語を話すので、みなさん本当に勘弁してください(会場笑)。

韓国語ならもうちょっといろいろ奔放(?)にできるんじゃないかなと思うんですね

ど、私の日本語が少し制限があって、適当な表現になるかもしれないけど、でも、最善を尽くして、韓国の事情をみなさんといろいろ交換したいなと思うんですね。

もうひとつは、私は朝倉さんが紹介したように、韓国の代案学校の連帯、「代案教育連帯」とか、「ミンドゥルレ」というところで冊子を作ったりする、そういうことで、ある程度は韓国の事情をよく分かってるといような気はしますけど、でも、私の目線で見ただけで、私は学者でもないし。だからこれをどういうふうに正確に伝えるかっていうことになると、少し心配はあります。

だからこれは、ただキム・キョンオクという者の目線で見ただけで、それで、その人が考えたこと、って思ってもらえたらいいなと思います。

他の韓国の人々がまた来て、他の目線で話したら、それも良い事じゃないかなと思うし、だから私は今日、私のことを伝えますので、そういう面も勘弁してください。

そうすると早速内容に入りますけど、今回のフォーラムのテーマが「協力」だったんですね。官と民の協力と聞きましたけど、今タイトルはこうなってるんですが、これも韓国では官と民の協力の流れっていうか、その一つなんですけど。

この流れが一つ韓国で主に、韓国でもいろんなガバナンスがおこなわれたんですけど、教育というもので学校の外でやったことが、学校の中と一緒にガバナンスを持つのは、すごく難しかったんです。

というのは、学校の中の人たちは、いわゆる学校の中の先生とか、韓国で教育を担当する教育部とかは、学校の外で動いてる、そういう教育の動きを正式にあんまり認めてなかったんですね。「あれは教育ではない。ただの活動」、「ただのプロジェクト」、こういうふうに捉えて、それであんまり認めてないんだけど、今回のこの動きは、やっぱり教育として認めて、それで学校の中で教育を主にする人たちとの協力ができたっていう点で、すごくいいんじゃないかなという、そういう面があつて。日本でも少しでも伝えたいなという気持ちはあります。

早速入ります。このタイトル（注「海外先進事例を学ぶ」）は実は、この間12月だったんですね。朝倉さんとシュレ大で韓国にインタビューに来ました。

そのインタビューはオデッセイのことを知りたいということで、インタビューに来ていて、いろんなところをインタビューしたり、取材したりしたんですけど。

そのとき私が取材しにきてるシュレ大の人たちを、ソウル市の教育の区議長である、教育監とのインタビューを作ったんですね。

それで教育監のインタビューの中で彼が言った言葉（注タイトルの事）なんです。だから、これを私が日本に行って話すつもりであつて、どういうのを持ち出すかっていうことを考えたら、「あっ、これをしましょう」ということでタイトルにしましたが、それは後でまた話します。

まず、映像をひとつ見ます。字幕がないから、すいません。ただ雰囲気だけ見てください。これは(韓国の)入試の日なんです。

(ここから映像が流れる)

キム：(映像の中で話してることをとところどころ日本語に訳す)応援にきましたって。2年生が3年生を応援してます。頑張ってください。

(映像を観ながら)この人がオデッセイをやっています。教育監です。

(ここで映像を止める)

キム：これは入試の日の当日のニュースなんですが、何が大事かという、ある時間帯には飛行機が飛ばません。

なぜかという、その時間に英語のヒアリングのテストがあるから、邪魔になっちゃダメですので、飛行機も飛ばません。

それで、この日は出勤時間も公務員だけじゃなくて、ほとんどの会社の出勤の時間が、だいたい朝10時になります。

それは学生たちがテストを受ける教室に入っていて、安全に始まって、それで韓国の他のところが始まります。

これは韓国ではすごく大事にされる、そんな日なんですけど、こんなに大事にされるのいいかどうか、韓国の教育の問題なんですね。

これが私は韓国のいけない教育の状況の象徴じゃないかなと思うんですけど、今画面で見たように、高校一年とか二年の子どもたちが、高校三年の先輩の受験戦争に、本当に軍隊に兵士を送るような感じで、みんな応援しに来るんですね。

それを自分がどういう立場にいるか、どういう状況にいるかをよく分からない。そんな感じで応援を、「ファイティング、ファイティング」をやってるんですけど。

まず、こういう話はすごく簡単にしたいと思うんですが、韓国は日本と同じように学歴社会であって、これは80年代から常に学歴社会、学歴社会といってるんですが、そんなに変わってないというか、最近、5年か10年前ごろになって、少しずつは変わってるんだなということがあります。

特に去年ニュースとかで結構あったのが、韓国的高校は大きく分けて2種類があります。大学に行くための高校、行かない高校。

でも、行かない高校に入ってもだいたい(大学に)行くんですけど、だから高校三年生の卒業生のだいたい85%は大学に行きます。

でも、それが去年になって、70%が受験に入りましたというニュースが出たんですね。だから、少しずつ減っているんですけど、そのニュースの中で、韓国は鷺梁津(ノリャンジン)という町があるんですけど、その鷺梁津(ノリャンジン)というところは、どういう町かという、いろんな塾がいっぱいあるところなんです。

特にどういう塾がいっぱいあるかっていうと、公務員になるための試験に備える、そんな塾がいっぱいあります。

そこに高校一年生たちが登場しました。今までそういう塾には大学を卒業して、それで他の会社に通いながら、まだ安定した職場に行きたいなという思いで、そこに入る人が多いんだけど、去年のニュースには高校一年生が塾に入りましたっていう、そういうニュースが出ました。

そういう子のインタビューをしたら、「私は大学の勉強より、大学の4年にかかるお金を貯めていて、今勉強して公務員になって、楽しいことをしながら人生過ごしたいんです」という答えをする。そういう高校1年生もいたんですね。

そういう現状を見ると、やっぱり徐々に徐々に学歴社会は少しずつでも崩れていくんだなと。まだ、崩れてますよということは言えないけど、少しは変化してるんだなということはありますね。

それで学閥主義。これも深刻です。これは日本はあんまりないんですかね？

朝倉：少し。

キム：少しありますか。でも、韓国はこれはひどいんですね。私、去年 APDEC のときも少し話したんですけど、韓国では、去年大統領が変わったんですね。

それで大統領が変わって、自分と一緒に仕事をする長官とかを選ぶんです。選抜して一名ふるんですけど、そのとき例えば、ある高校出身の人を教育部（注）に決めたら、その次の外交部とかは、他の高校にしないと、例えば、西とか東とかソウルとか、そういうのを考えながら決めないと反発があります。

というのは、今まである高校の出身が全部やったので、その記憶がみんなあって、それを乗り越えて行きましょうという雰囲気があるので、かえってその高校出身で良い人がいっぱいいても、それを均等に分けて人を選ぶ。そういうのが正しいというふうな、学閥主義を乗り越えるために変になっちゃってる。そういうこともあるんじゃないかなと思うんですね（会場笑）。

それで、先程見たように、高校一年生で鷺梁津（ノリャンジン）にある、公務員の受験の勉強をする高校一年生もいるんですが、まだまだ大学入試戦争はすごいんですね。これが一つ、後で話すオデッセイの始まりのきっかけになります。

韓国の特に小学校とか中学校までは、もちろんそれも問題はいろいろあるけど、高校に行くとなんてひどくなるんです。

だから、高校で一番大事なのは、やっぱり成績なんです。この成績は、韓国の大学はだいたい並んでいます。みんな分かっています。

全国今年 70 万人が受験をしたら、その内 5000 名はどこ、その次 5001 から 10000、名まではどこ、こういうふうに並べます。もちろん、その中には例外的に自分の大学を

選ぶ、自分の適応とかそういうのに合わせて行く人もいるけど、だいたい自分の成績に合わせて選びます。だから自分がどこに行きたいとか、そういうのじゃなくて、ある成績になればある大学とだいたい決まるんですね。そういうふうになるから、韓国の高校の教育はいい大学に行かすために、子どもをまず並べます。一等から最後まで並べます。

英語とか数学とか、韓国では数学をあきらめてる、そういう子が多いんだけど、なぜか。実に数学とかはすごく大事な科目なんです。でも、韓国では、特に高校の数学はすごく難しいといわれます。日本はどうですか？

朝倉：難しいです。

キム：日本も難しいんですよ。こういうふうに特にテストが難しいし、範囲もすごく広くて、深いところまでいくんですけど、なぜそういうふうにするか。

みんな学者にさせたいのか。そういうわけでもないのに、なぜそういうふうにするかっていうと、それはやっぱり並ばせるためなんですね。

難しければ難しいほど、それを弁別しやすいんです。だから数学とかもそうですし、英語とかもそうですし、いろいろ難しくさせるのは、やっぱり子どもにこの知識は本当にいるということじゃなくて、弁別させるために難しくさせる。そういうことじゃないかなと思うんですね。

あるイギリスの若者たちが、去年受験のテストの中で、英語のテストを持ってイギリスに行って、周りの人にそのテストを一回見てみてくださいと言ったんですね。

それでイギリスの国語の先生、大学院生、こういう人たちにその英語のテストの文章を見せたら、全然分からない。

10人程にそのテストを見せたんですけど、正解を言ったのは一人もいない。だから、その人たちの話は、それはYoutubeにありますけど、そういう彼らの話は「えっ、これって英語なの？」(会場笑)、「こういうの勉強してるの？」という反応を見せるんですね。

だから、韓国の英語の勉強でも、それは本当の英語の勉強じゃなくて、試験のため、テストのため、それで一等・二等・三等を分別、弁別するためにしかない、というふうにいわれます。

本当にその人その人の英語の実力が高くなるというのは、あんまり関心事ではないんですね。だから、子どもたちは規制されるという、これは日本も同じ現状にあるんじゃないかと思うんですけど。

自分が規制されるということも分からずに、先程見たような映像の中の子どもたちみたいに、みんな楽しく先輩の受験戦争を見ながら、応援してるんですね。自分は規制されてるのに。

だいたい韓国の高校の1クラスの学生が25~30名ぐらいになるんですけど、その25~30名の学生のうち、座って勉強してるという学生は5名しかいないというふうにいわれます。

たった5名。30名から5名だから、パーセントとしては18ぐらいになるんですね。18はなかなか難しくても、でも座って勉強します。

それで3分の1ぐらいは勉強するふりをします。でも、実はしてません。それでまた3分の1は反発しています。反発してるかどうか分らずに、寝たり、他のことをやったり、マンガを見たり、ゲームをしたりする。そんな形になっているんですね。

先生たちは「寝るのはいい、寝るのはまし」(会場笑)。なぜかという、他の友だちが勉強する邪魔にならないから、寝るのはましというふうには見えてるという、そういうことがあります。

だから、それを教育の場所だと言えるかどうかは、みんな疑問を持ってるんですね。これに関して韓国の人々は、文句はあんまりないと思います。

それで、こういう状況があって、そんなに変わらないというか、前よりは少し普通。変わってはいるんだけど、これが一番ひどかったのが、「あっ、ひどいな」っていうのをみんなが切実に分かったのが、韓国では90年代というんです。

その前までは、韓国人は食べていくのにすごく精一杯だったので、これが間違ってるとか、そういうを感じるアンテナというか、そういうのがあんまり敏感じゃなかったんですね。

それが90年代、95、96になって、自分の周りにあるものに関して、制度に関して、それでいろんな文化に関して、アンテナをはるようになったんです。

それで、アンテナをはって行って、これは本当に私たちがこのまま教育を置くのは、罪を重ねることだということで、これを変えようという動きがあちこちであったんですけど、こういう動きは学校の中でもあったし、本当にいろんなところであったんです。

そのうち学校の中じゃなくて、学校というシステム自体を問う。そういうグループが出始めたのが、1996年頃だと思います。それを新しい教育の動きと行って、韓国では「代案教育運動」といってます。

「代案教育運動」が始まったときは、代案教育はこういう代案ですよっていうのは難しかったんです。

ただのアンチ。これではダメ。Aはダメ。Bはダメ。私たちはCはしません。というふうに分たちのアイデンティティを決めたような気がするんですけど。

それが少し時間が過ぎて、アンチだけじゃなくて、オルタナティブ、代案を作るようになったと思うんですけど、まずは反対だったんですね。

だから入試教育はしません。順番を数えるのはしません。~はしませんという、そういう教育をやろうという気持ちが大きかったと思うんですね。

だから、個人差が結構あったんですけど、ある時期は、韓国の学校の中では、やっぱ

り初めに代案学校が始まったとき、そこには結構偉い子どもたちも来てるんですね。

特に韓国の代案学校は、高校が始まって、その次に小学校ができて、その次に中学校ができるという順番になるんですけど、ガンジー学校とか。それでソウルのすぐ隣にある盆唐(ブンダン)という、新都市があるんですけど、そこに以友(イーユ)学校という、結構偉い学校ができていて。

そこには頭が良くて、保護者たちもすごい文化資本・経済的な資本を持ってる。そういう人たちが、子どもの進路・未来を支えられる。そういう力を持ってる保護者たちが、そういう学校に子どもを入れたんですね。

その結果かどうかよく分からないけど、その学校では、いわゆる韓国で一番良いといわれるソウル大とかにも入ったんですね。

そういうことがニュースに流れて、みんなその学校を指しながら、「あなたたちは代案教育ではない」と、「なぜ大学に行かすの?」と、「ただの大学じゃなくて、なぜソウル大に行かすの?」というような、そういう文句を言ったりもしました。

それはやっぱり入試教育に反対しますということだったんですけど、実は入試教育の本質を探ったんじゃないかって。

まあ、子どもが望んで大学に行くこともあるんじゃないですか。それでその子の人生に大学が必要になるかもしれないんですね。

良い大学に行ってもいいんですけど、それが罪みたいに、私たちは純粋に代案教育をするためには、ソウル大には行かないほうがいいのか、そういうのが初めの頃はあったんですね。今はそうでもないんですけど。

去年は、その去年の大学入試で、全国で一等の子が代案学校出身なんです。その一等が同じ点数を得た子が、全国で3人いますけど、70万人の中で3人が一等なんですけど、その一等の中でも、どういう科目を選んだかによって点数が違いますが、その一番上の点数を得た子が、代案学校出身なんです。

その子は当然ソウル大に入ったけど、その子の学校にマスメディアのインタビューが入ったんですね。

それでその校長先生が、「私たちは、彼が大学に入るのに一切の手を加えてないです。自分の力で行きました。」というふうな話をしましたけど、それはそれなりのいろいろ事情がある、訳がある答えだったんじゃないかなと思うんですね。

でも、かえって考えると、やっぱりこういうふうな代案的なやり方で、あの子は小学生から代案教育を受けた子なんですけど、こういうふうなやり方で学んでも、何でもできるということをかえって証明したんじゃないかなということ、今になって思ってるんです。

でも、初めは代案教育はこういうことを鮮明にしました。それで学ぶものが主体になる教育。デモクラティック・エデュケーションですね。

それでまだ私たちが大事にするのは、共に生きていく力を育てる市民教育。これをす

ごく大事にします。

韓国は新しい教育運動、代案教育をやり始めた人たちは、社会運動の流れの中で、特に「386」（さんはちろく）といってる。みなさん聞いたことありますか？

今はもうすでに彼らは586になってるんですけど、386というこの新しい単語ができたのは、90年代なんです。90年代の時点で、90年代に30代であって、それで80年代に大学に通って、それで60年代に生まれた人たちを「386」というんですけど。

彼らの特徴は、やっぱり韓国のそういう流れによって、民主化運動を一生懸命した世代。80年代に特に85、86、87。軍事政権を終えながら、民主化する。そういう流れがあるんですけど、それを自分自身の力でやってきてる世代を「386世代」というんですけど、彼らが大人になって、また親になって、そういう人たちが新しい教育運動をする。

教育専門家たちじゃなくて、専門家もいたわけなんですけど、そういう専門家だけじゃなくて、新しく教育の場に入ったのが、彼らが親になって子どもができて、子どもを学校に行かせようと思ったとき、ここには行かせたくないということで、こういうふうな流れに合流したということになるんですけど、だからこそ、その学校で学ぶ大事な内容は、市民教育というふうに言ってます。だから、いつも代案教育をやってる活動家たちも、自分は市民として生きていくんだと。だから社会の問題とか、社会の流れとかにいつも関心を持って、アンテナをはりながら、そこの変化に私も主人として、主体として動きますという気持ちを持っていて、一人の市民として生きていくということがあったり。また子どもの教育にも、これをいつも考えながら教育の内容を組んだりする。そういうことが、代案教育運動の中ではありました。

それで、代案教育は整理すれば、やっぱり制度。学校を近代教育システムとして、学校というものがあるんですけど、本当にその学校というシステムの中で、どうもしようがないような、そんな感じを持っている人が結構多かったんですね。でも、これを乗り越えるかということ想像もできない。そんな状態のとき、それは乗り越えてもいいんじゃないかなと。制度、そういうものは、私たちは知らん顔をしてもいいんじゃないかなということで、制度と関係なく本当の教育ってなんだろうっていう質問をしながら、一日を作っていく。ということをやってきたのが、韓国の代案教育運動というふうに言えます。

それでこれはやっぱり姿勢なんですね。こういう姿勢でやったので、結果的に本当に良い物にしたかどうかは、それには自分自身も疑問を持つときもあります。これでいいかなというときも、反省したりもするんですけど、たしかに、新しい教育運動をやりながら、それをやってきた人の姿勢はこういうものだったということは、言えると思います。

だから、結果的には誰も規制させない教育をしたい、というのが私たちのヴィジョンというか、そういうのでないかなと思うんですね。それで、こういう心持・姿勢で20年ぐらいやってきたので、韓国の社会では、こういうふうに結構評価されたり、尊重さ

れたりしました。

「これも教育だ」、「学校の中だけでやってることだけが教育じゃなくて、今、制度の外でやってるけど、卒業証もなく、学校の認可も貰ってないんだけど、これも大事な教育だ」、「かえって、これが教育だ」というふうな見方で見てる。そういう反応もあったんですね。

これが代案教育をやってる人たちの誇りというか、そういうのにもなりました。

でも、この反応は、先程私が一番最初に言ったんですけど、韓国の中で主に学校という、このシステムを握ってる教育部。あるいは、教育学者等はこういう評価はしてないんです。

かえって、社会学者、科学者、文化学者、その中央の部署でも、文化部とか女性家族部とか、あるいは自治体。教育とは関係ない自治体。こういう人たちが、こういう（肯定的な）反応を見せました。

だから、教育を専門にする、「私は教育が専門ですよ」という人は、代案教育を教育として認めるということは、なかなか難しかったと思うんですね。

それは複雑な利害関係があると思うんですけど、とりあえず、社会的な反応はこういうものでした。だから、これからいろんな社会との連結・つながり・協力が始まります。その始まりで、最後にオデッセイも始まるんですけど、これを見ましょう。

(ここで映像を観る)

キム：だいたいの様子はみなさん、この映像で分かったと思うんですけど、さいわいに字幕が入っていてよかったですね（会場笑）。

この人は、今ソウル市の…韓国は中央の部署で教育部があって、また各自治団体に教育庁という、独立した機関があります。

そこで、その地域の教育は全部独立して担当してるんです。この教育庁の首長は選挙で選ばれます。

それは、広域市あるいは、日本の県と同じような「道」、第2の教育長は選挙で選びます。

そういうところで、ここから2011年ですよ。2011年に韓国では、本当に痛ましいことがあったんですけど、高校生たちが修学旅行に行く船が、済州島に行く船が、セウォル号という船だったんですけど、それが行く途中の事故で300名以上の子どもが亡くなるというような事故が、2011年があったんですけど。

本当にその日は、韓国の人は誰も忘れられないと思うんですけど、私も本当に今でも鮮明に浮かぶのは、その日私が出勤する前、仕事場に行く前に、テレビのニュースを付けて、それでいろいろ出勤の仕度をするんですけど、そのニュースで、韓国でYTNというニュースの放送があるんですけど、その最初のニュースの内容は、「(子どもたち

が)全部救われました」というニュースが流されていて、「ああ、安心だね」と、「事故があったけど、よかったね」と言いながら、顔を洗ったり、歯磨きをしたりしてたんです。

歯磨きをして、頭を乾かして、パッと見たら、そうでないニュースが流れてるんです。それでカメラは、その船が徐々に海に沈んでいくようなのを、生放送でやっていたんです。

その生放送で放送されてるのを、韓国人は本当にみんな見たと思うんですね。それがトラウマになるような、そんな日だったんですけど。

それが沈む前に、子どもたちがみんな救助されたらよかったのに、それがうまくいかなかった。

うまくいかなかったというか、それが政府の本当にいけないところだったんですけど、それで弾劾(00:45:26)されたりもする。結局それで韓国人は許せなかったんですけど、その日の事故を見ながら、それがあったのが4月16日なんですけど、その年の6月に教育庁の首長を選ぶ選挙があったんです。

地方選挙があって、そこで韓国の教育を担当する首長の9割に、進歩的な人が選ばれました。

今までの教育の流れではダメだということを、そのときの親、選挙に参加する人々はみんな実感したんですね。

直感をしながら、だから他の形でやり直しましょうということが、韓国の中で本当に導かれていって、それでさいわいにそういう人を選んだんですけど、それで、選挙で選ばれた人が、さっきの教育監であります。

だから、彼は今の大統領が、いつもケンドルの集会(ケンドルは candle の韓国語読み。ここでは政治に抗議する市民によるキャンドルデモを指していると思われる。2008年の蠟燭デモが有名)に出ている国民の、市民の声を自分の頭の中に入れながら、いろいろ政策を取ったりするのと同じように、韓国の教育監たちは、教育庁の首長たちは、セウォル号の子どもたちを考えながら、彼らが私たちに言ってることを、たしかにしなきゃという、そういう注文は結構あったと思うんですね。

それで彼は選ばれて、「さあ、何をしようかな」ということで、いろいろ考えたと思うんですけど、その前からも今のソウル市の教育監のことだけじゃなくて、韓国では、いろんな代案教育と他のことの協力具合、ガバナンスは結構活発にあったんです。

先程言ったように、その代案教育の流れ・動きが教育として少しは認められている。教育の中では認めてないけど、社会的には結構評判があったので、いろんな周りからの、ネットワークの提案とかがあって、いろいろやったんですね。

それで、出会いの事例といえば、代案教育が学校の教師の成長を助けたということも、ここにあるんですけど、例えば、代案教育の運動をするために、各それぞれの学校としては難しいこともあって、韓国では2001年度に連帯を作ったんですね。

代案教育連帯という運動団体を作ったんですけど、その運動団体に教育部から、2006年度ごろに、「それを全面的な教育としては認めないんだけど、あなたたちがやっていることは、結構私たちには良い面になることもあるね」ということで、公教育の学校の中の先生に、「あなたたちがやっている、いろんなプログラムを紹介してくれ」というお願いがあって、それで研修をやったりもしました。

私たちは、そういう企画…代案教育連帯にこういう提案がきて、いろんな研修の企画をしたり、実行したりしたんですけど、そのときいつもがっかりしたのは、講演をしたり、いろんなワークショップをしたりするんですよね。

それをした後にどういう質問がくるかという、「じゃあ、マニュアルはないんですか？」っていうんですね。

私たちは哲学とか、姿勢とか思考とか教育…。マニュアルじゃなくて、方法じゃなくて、方法は自分なりに自分がある条件の中で探すべきであって、ただ何のために教育をするかを一緒に話して、それを一緒にすれば、そこを持っていて、自分の場で、自分で考えてやるべきなのに、私たちにいつもそう尋ねるんですね。

「じゃあ、そうすると、国語の時間にはどういうプログラムをすればいいですか？」ということになっていて、がっかりしたりもしたんですけど、でも、少なくとも私たちが言ってることで、学校の中の先生たちが、少しずつ変わればいいんじゃないかなということ、こういうことも一生懸命しました。

これもひとつのガバナンス、協力じゃないかなと思うんですね。それで、出会いは小さな学校という、日本も同じだと思うんですけど、特に地方にある、田舎とかにある小学校は、子どもの人数が減って行って、規模が少なくなるんですね。

だから、そういう学校は教育部では、国ではこれを廃校しようという、そういう政策を取ったんですけど、でも、その学生とか親とか先生とかは、小さいからこそ教育ができるんだという、そういう目線でその学校を生かしたいという活動をしてる人たちもあつたんですけど、そういう人たちとのつながりも結構活発にあつたんですね。

規模が小さいから、中央からのおせっかいもそんなにうるさくないから、代案学校でやってることを小さな学校でやってみようとか、そういうことが活発になってるというのも、一つの出会いの事例じゃないかなと思うんですね。これは2001とか2002とか、そういう時期に活発にやりました。

それで代案学校が教育の実践として認められて、それを公教育、制度教育の中に入れようという動きがあつたんです。

そのままそこでやってることは認められなくて。私たちの胸の中に入ってねというような、そんな感じで制度化することがあつたんです。

でも、これも今考えてみると一つの出会いというふうには言えるんだなと思います。

その例としては、特性化学校として、例えば韓国で一番最初に作られたガンジー学校とかは、初めは認可されてない学校として出発したんです。

本当に卒業証もないし、学歴も取れないし、そんな状況で出発したんですけど、そのガンジーでやってることを教育部で認めていて、あなたたちのそのままを、卒業証も学生に配れる、それで国の支援も、補助金も与える。そういう状況を与えますから、貰ってくださいということで、制度化したのが特性化学校。

その特性化学校は、昨日、奥地さんがおっしゃった、特区と少し似てるような感じがするんですけど。

もともと学校をするためには、韓国も学校法人でなければダメなんですね。だから、学校法人というものはそのまま置いていて、建物は一般の学校の建物より小さくても狭くてもいい。

それで、先生の資格も5割ぐらいい資格があって、5割ぐらいい無くてもいいとか、そういう条件を少しゆるやかにして、制度化するという動きがあったんです。

これも2000年度の初めごろから、こういうのが頻繁にあります。それで代案学校という名前で法律になったのもあります。

韓国の学校設立法は、大きく分けて一般学校の設立。それでもう一つは各種学校の設立があるんですけど、一般学校はいわゆる普通の学校ですね。小学校・中学校・高校。これは韓国では設立するのにすごく条件が難しいんだけど、各種学校は結構しやすいんです。

その各種学校を設立する主体は、学校法人でなく、NPO法人とかでもできます。だから、その各種学校のラインに、そのラインに代案学校の認可を入れて制度化したんです。それが2006年度。

それで代案学校と、この名前で認められればお金もあげます。何か支援もしますということをやったんですけど、これは代案教育の中ではすごく岐路になりました。

国が代案という、この単語を持っていていいか。これが私たちの質問(?)の一番大事なポイントだったんですけど、それでしようがなく法律ができました。

でも、法律はできても、この代案学校として制度化されてる学校の数は、そんなに多くはないんです。

今、代案学校として認可されている学校の数が、正確な数はよく分からないんですけど、だいたい20個にならないと思うんですけど、教育部でこの法律を作るときは、たぶん、この法律で認可すればみんな入るんじゃないかなということを行ったけど、でも、いざ入ったのは、20年前から教育運動をやってきた人たちは、全然入らなかったんです。

というのは、「私たちとはふさわしくない。その法律は問題がいっぱいあるから、私たちは入らない」というふうになって、入らなくて。

それ以外に、一緒に教育運動をやってきた人たちじゃなくて、ある面で私たちも代案ですよというふうにな乗ってるいろんなところがあるんですね。

そういうところは結構入っていて、その数が25弱になるんじゃないかなと思うんで

すね。

でも、とりあえずこれも出会い。制度教育と制度の外にあった教育の出会いの事例じゃないかなと思うんですね。

それで、委託型代案学校というのがあるんですけど、これが私は問題だと思うんですが、これの問題は、韓国では、教育部では代案教育をそのまま認めたくない。でも、「私たちが学校の中で問題児として見てる、非行をする子どもとか、学校で適応できない子どもとか、そういう子には特別にこういう教育は必要だね」、というふうな見方はあるんですね。

それで、「そういうことなら学校であんまりうまくいかない子どもを、あなたたちがケアしてくれるなら、それは私たちが認めますよ」というような、そういう姿勢を持ってやってやったのが、この委託型代案学校なんです。

だから、ある民間に委託するんですね。どういう子どもを委託するかというと、私たちはこういうふうに言うんですけど「爆弾」。

一般の教室の中で爆弾的な存在。問題を起こす。そういう子どもを本当に教育的に成長させるには、精一杯で難しいから、彼を委託されますということで、委託することがだいたいだったんです。子どもの選択とかは全然なくて、学校が選択して追い出すような、そんなところだったんですね。

だから、こういうところで子どもは自分自身が自分を否定しながら、「私は爆弾だな」と、「私は問題だな」と思いながら、送られた学校で教育とか学びとか成長とかがありえることはないんですね。

だから、委託型の代案学校は補助金を貰ったり、いろんな支えがあるからやってるところは結構あるんだけど、本当に苦労してます。それでまだ出会いというのは、革新教育とか、革新学校に影響を及ぼすということもあるんですけど。

韓国の中では、さきのセウォル号のこともあったりして、とりあえず今の学校はダメだということがあって、いろいろ革新的な、システムはそのまま置いていて、革新的なやり取りをいろいろやってるんですね。

その革新的なやり取りの一種のモデルというか、そういうものとして代案教育を受け入れるんです。だから、こういうふうな出会い、制度教育と制度以外の教育の出会いがありました。

その次がオデッセイなんですけど、オデッセイは、先程の教育監の説明を言ったように、オデッセイは委託、形では委託なんです。形では委託なんですけど、教育として認めて、今の学校でやっていない本当の教育なんですけど、今の学校では限界がある。そういうことをやってるところに、子どもが選択していくような形にしたのがオデッセイなんです。

オデッセイが始まるまで。協力の仕組みを作るまでの話なんですけど、2014年度に、9月に準備を始めました。

さっきのソウル市の教育の区議長が選挙で選ばれて、この人の公約の中で、こういうものがあつたんですね。「一般高校を生かします」という公約を選挙のときしました。

一般高校というのは、韓国でいわゆる人文高（商業高校と工業高校以外の高校）というところで、だいたい大学に行くための高校なんです。

それは韓国の高校の中で7割ぐらいになる、そんなに多い学校なんですけど、ソウル市の人文高校、一般高校を生かします。生かしますというのは、今死んだような状況です。そこで生かします。

それを生かすために革新教育とか、革新学校とかを作るんですけど、それ以外にももう一つやります。それがオデッセイだったんです。

オデッセイを考え始めたのは、この人が教育監、首長になって、高校の視察に行ったんですね。

高校の視察に行ったら、廊下を歩きながら教室の中の様子を見たんですけど、そのソウル市の教育の首長が来た日なんだけど、子どもたちの様子が、この人の様子、自分が思った酷さを上回ったんですね。

窓から教室の中を見たら、本当に半分以上は寝ていたんです。教育監が来た日なのに。たぶん先生たちは注意をしたと思うんですね。「今日は偉い人が来るから、みんな緊張して」とか、そういうふうにしたと思うんですけど、なのに、2分の1ぐらいは寝ていて。

それを見てびっくりして、反省をいっぱいしたわけなんですよね。「彼らがそんなに寝ているのは、彼らのせいではない。たぶん胸の中に何かあると思う。だからそれができるような何かを緊急にやりましょう。緊急が大事なんです」ということで、私たちの民間に呼びかけをして、それで始まったのが9月の準備委員会です。

それで、準備委員会をして、教育庁からの庁学委員という、そういう担当者が入っていて。

それで、代案教育専門課なんですけど、そのときは私が入ってたんですけど、それで一般高校の先生も一人入ってたんです。

それで計6名が準備をする、TF(タスクフォース)をするようになっていって、いろんな絵を描いたんですね。それでオデッセイの方向性とか、教育の内容とか、協力の仕方とか、そういう全般的なものを9月から準備をして、2015年度の5月26日に始まります。

もともと韓国の場合は、3月2日に始まるんですけど、2015年度、オデッセイの場合は、そのときまではまだ準備が足りなくて、少し遅くしましょうということで、5月26日に始まります。

それでお互いにいろんな話をしたんですけど、一番大事なのは、オデッセイは民・官協力で運営する学校だということ、これを鮮明にしましょうということは、お互いに間違っなくて、協力をする間で、ただ口だけじゃなくて、本当に相手を民・官協力相手として認めて、それで一緒にやるということがオデッセイということを鮮明にしました。

私はこれができたのは、代案教育運動をやりながら、今までいろんな出会いがあったということを見せたんですけど、でも私たちの間では、官庁に対する、公務員とか官僚に対する信頼感というか、それはそんなに高くはないんです。

韓国人、特に私のような「386 世代」の中に同等に流れてるそういう考えは、彼らを信じちゃダメと（会場笑）、彼らはいつ変わるか分からないっていうようなことがあります。

だから、昨日、私がいろんな日本の協力の事例を聞きながら学んだのは、みんな事例を話した後に、「一番のポイントはなんですか？」と最後の質問をしたら、「戦っちゃダメですよ」、「いらだっちゃダメですよ」と、「怒らないで我慢して得る物を得てください」というふうなアドバイスをするのを聞きながら、「そうだね。我慢しなきゃ」と（会場笑）、本当に昨日、私もいろいろ学んだんですけど。

今までは、そういう私の中にも相手に対する信頼感というか、そういうのが 100 パーセントまではいかなかったんですね。でも、先程の教育監、首長の場合は、韓国では結構レベルな大学があるんですけど、その大学の教授であって、それで「チャンミョ(ン)ヨンデ(01:06:23)」という、三条連帯(?)という市民団体があるんですけど、そこでも一生懸命一緒になって仕事をしていて、結構信頼できる人だったんです。

だから、彼が首長にいる。それで彼が教室を見てびっくりして、緊急にやりましょうと言ったということ、それがひとつあって。もう一つは、彼の秘書官であった人が、私たちと一緒に代案教育を作っていた人なんです。だから、彼らが教育庁の中ではいわゆるキーマンになっていて、それで私たちとの関係を作るような形になっていったんですね。

だから、まだまだ官庁とは 100 パーセントにはならないんだけど、とりあえず信頼をしながらやってみようという気持ちはあったと思うんです。これが一番大事だったと思うんです。それで教育庁がこんなことをしました。教育の役割分担をこういうふうにしましょうということになったんですね。特殊予算。ひとつオデッセイというものは、民間で子どもたちが一年間を過ごすんですけど、その一年間を学歴として学んだとして、認めます。その認める形は、総合生活記録部という、記録の形式があるんですけど、そこにちゃんと入れます。

だから、それは大学に行くのに、何をするのにそれは大事な記録として認められるんだけど、オデッセイの一年はそこにちゃんと、全部の時間が、全部の教育活動がそこに記録されます。だから、学歴認定のためのいろんな事務、仕事もあるんですけど、それを教育庁で担当しますということになりました。

それで、民間は…あとでまた話すけど、教える人、いわゆる先生なんですね。日本のフリースクールとかでは、大人をスタッフというんですけど、韓国ではだいたい代案教育でやってる人を教師とも言うんです。

それで私たちは教師という言葉よりは、案内してくれる人というような意味で「キ

ル・チャ・ビ(01:09:04)」というんです。

「キル」は道です。道を案内してくれる人というふうに、私たちは言うんですけど、その「キル・チャ・ビ(01:09:15)」の選抜、それで彼の養成、こういうのは民間で全部握ります。

それで教育内容も私たちがやります。それで、教育活動全般に対しては関与しないでくださいというのを、役割分担ではっきり決めました。それで私たちがやってることを、独立的な教育活動として保障すること。文句を言ったりすれば、私たちは撤去しますということをはっきりしました。

私たちがそういうふうに頑固に言えたのは、やっぱり教育庁から私たちに緊急に頼まれたので、結構頑固に言えたんですね。こういう原則を持っていて、一緒にいくようになりました。

それで、これが始まる時、協力するということで、あとでもこういう協力する形で、始まる前に協力するんじゃなくて、始まってから、運営する途中でも協力しましょうということで、一緒にこのオデッセイの運営に関して議論する、話し合う、そういう仕組みを作ったんですね。それが運営委員会なんです。

それには、教育庁からも入っていて、私のような民間も入っていて、1カ月に1回いろんな会議をしながら、方向を決めたりもします。

それで実際のものなんですけど、これは映像が一つあるんですけど、これは少し見て切ります。

(ここから映像を観る)

キム：これは字幕なしで雰囲気を見ます。(映像を観ながら、ところどころ韓国語を日本語に訳す)「尊重されている。言葉が多くなった。本当の余裕ってなんだろうというのを知るようになった。勉強する目標ができた。」(ここで映像を切る)

これは一年間のシステムですので、一年ごとに自分たちの一年を見る、ふりかえって見るというような催しがあるんですけど、そこで講演をしたりする、そういう様子を撮っていて、映像にしたものなんですけど、子どもたちの発言とかもあったので、時間があつたら字幕を入れてやりたかったんですけど、すいません。日本語でなく韓国語で。

そういうふうな子どもたちの様子を見られるんですけど、このオデッセイというものは、システムとしては高校自由学年制という政策の名前をとってるんです。この名前になってるのは、韓国のいろんな革新的な教育の政策は、ここ10年間いろんな政策が出てくるんですけど、その一つが中学校の自由学期制というものがあります。

自由学期制というものは、2016年度からは、韓国の全国の中学校では全部やります。だいたい一年か二年のうちに、一学期を自由にする、そういう学期が作られてるんですけど、自由と言っても、これは少し変なんですけど、一日を少し空っぽにして、どこか

に行ったり、この自由学期の場合はだいたい進路を探していく、というような目的でその活動をするんですけど、先生によって本当に自由学期としていろいろやって、意味ある時間を過ごすこともあるんですけど、そうでないこともあって、いろんな批判もあつたりもするんですけど、この自由学期制の一番大事なのは、その学期はテストがないんです。

だから、学校の一番の権力は、私が一番初めに言ったように、成績を上げることなんです。「あなたは一等」、「あなたは二等」。私が言ってる通りにすれば「あなたは一等。」

これが学校の権力ですね。本当に教えることはする。やることはまともなものでもないのに、現状的に権力を持っているのは、やっぱり成績を上げるから、そのおかげで卒業証をあげるから、それで権力を持っているんですけど。

一学期はテストをしないんです。それで評価、点数がないんです。点数がない一学期を過ごすというのは、私はすごく革新じゃなくて革命的だと思うんですね。

一学期でもそういう時間を過ごして、それを経験してその上に上がると、やっぱりその子どもにはある刺激が沁み込んでいっていくんだと思うから、これはすごく大事な政策だと思うんですけど。そこから、この高校自由学年。だから、評価をしない。そういう生活記録には残るんだけど、今までテストをして点数を得て、そんな活動じゃなくて。本当の教育に迫る、そういう教育をしましょうということで、高校自由学年制といわれます。

それは一年制度なんです。一年というのは、先程一般高校、人文高の一年生の中で、「私はここ一年をそこで学びたいです」、「ああいうふうに学びたいです」というふうに、希望する子があれば、そういう子を「ミンドゥルレ」で呼んで、それで一年間を一緒に過ごします。

これがオデッセイなんですけど、だから高校一年を過ごすためには、中学校三年のときオデッセイを選びます。中学校三年の11月にだいたい「自分がやりたいんです」、「私あそこに行きたいです」というふうな申し込みをして、今年2018年度の子どもたちは、去年の11月に申し込んで、それで今年は今私がいる「ミンドゥルレ」含めて、ソウル市で4か所でやってるんですけど、この4か所で全部でそんな数ではなく、90名なんです。

本当に小さな規模なんです。90名を選ぶのに、子どもたちは150名ぐらいが自分で申し込んでいて、だから選抜の課程もありました。とりあえず高校1年の課程です。

中学校の11月に申し込んで、自分は人文高じゃなくって、他の学校に行く子はここに申し込めないです。

人文高校に行く子どもしかここに入れません。それで合格したら2月ですね。韓国は3月に始まりますので、2月になれば自分がどういう高校に配置されるかということを知ってます。

だから、そこに行って、自分の位置、私はどういう高校に入ったかということを確認

して。それで私はオデッセイに行きますということで、オデッセイに登録します。

だから、籍は、兼籍高校というんですけど、籍は向こうにあります。向こうにあって、それで活動は私たちのところに来て1年を過ごします。

3月2日から。もうそろそろ。だから私ここに来る前に、もう「ミンドゥルレ」に来るように決まってる子どもたちが、今年は26名。全部で90名なんですけど、4か所でやってるので、今年「ミンドゥルレ」は26名になってるんですね。

その子どもたちと保護者たちとのオリエンテーションをしたり、いろんな企画をしたりして、バタバタしながらここに来ました。3月2日から始まります。

それで2018年の1年間を過ごした子は、来年の2月に元の学校に戻ります。私たちは今年で4期に入りますけど、今まで3期までの子どもたちが自分の元の学校に戻ったり、またその子どもの中には学校を辞めたり、他の代案学校に行ったりする。結構いろんな道を選ぶんだなということがありました。

特に1期するとき、1期は今より規模が小さかったんですけど、これはソウル市教育庁の事業であって、支援の議員たちの承認をもらわないとこの事業はいかないんですね。そのとき、1期の結果で、その子たちが中退してる、学校を辞めてる子が、40名のうちに12名ぐらいいたんです。それは割合としては結構高い割合ですね。だから、議員たちが「これはいけないんじゃないですか」ということで、いろいろ揉めたりもしたんですけど、私びっくりしたのが、その議員たちの質問に教育庁の担当者が、どう答えたかというと、「あれも私は進路だと思います」と（会場「へー」という感嘆の声）。「学校を辞めるのも進路です」というふうな答えをしたということ、あとで聞いて「あっ、やったあ」（会場笑）ということになったんです。

こういうふうな子どもたちが、オデッセイにはうまくいくんじゃないかなと思うんですけど、一言でいえば、言葉ではいけないんだけど、「私このままではダメだ」と、「私ここにいたくない」、こんな感情というか、この気持ちがあった子がオデッセイにくればうまくいきます。

それで、選抜。先程私が委託型の話をしたんですけど、そこは追い出された子どもたちと言ったんですね。この子たちは、まあ、お母さんが背中を押したかもしれないけど、まずは「あなたが希望したの？」というのを確認するのが一番大事です。それがオデッセイに入るか入れないかの基準になります。

オデッセイでは、この1年間を4か所でやるという話をしましたけど、（映像を観ながら）これがソウル市なんですけど…これも韓国語なんですけど…。ここが「ミンドゥルレ」があるところです。

それで、ここは少し西なんですけど「革新パーク」というところ、これはソウル市が持っているところなんですけど、すごく広いところなんです。そこのひと隅を借りていて。

ここは珍しく公教育から先生が選ばれて、その先生たちが1年間、私たちの民間に来て、1年間一緒に過ごします。その1年間私たちのやり取りを見た先生たちが、自分た

ちで、公教育の先生たちでやってるオデッセイがここなんです（会場から感嘆の声）。それも協力の一つなんですね。

それで、ここは「コントロール(?01:22:53)」というところがあります。それでもう1個はちょっと南にある「ハジャセンター」というところもやっております。

こういうふうに4か所で今やってるんですけど、それぞれ違うんですね。この公教育の先生がやってるところを除いて、3カ所はここ15年から20年間ぐらい、主に学校の外の子どもと一緒に学んできた、そういう期間だと思んですけど、やっぱりオデッセイという、この政策このものは実験かもしれないけど、挑戦かもしれないけど、子どもと直接会って、子どもを成長を支えるというものは、実験ではダメなんですね。（修正）

だから、そういう経験がある。教育的にも信頼できる場所を選びましょうということで、ソウル市の中にある教育の経験がある場所を選んで、それで民間の協力の「エモユウ(?01:23:56)」みたいなのを対決(?01:24:00)して、それでやっております。

それで戻って（話を戻すと）、1年間学びとしてはいろんな形でやりますけど、4か所の学びはそれぞれ違います。でも、その要素は違うんですけど、だいたいこういうのを頭の中に、気持ちの中に、心の中に入れていて、毎日やっております。ということは言えますね。これは時間があつたら説明したかったんですけど、いきます。

それで今年は4つの機関で90名の子どもと一緒にやっております。それで1期をやって、2期は2016年度から常に周りからも、教育庁の中でも、それで私たちからも常にあつた話は、これがいいと言え、これが持続可能であるかどうか。持続可能であるためにはどうすべきかという質問を常にしました。

その質問をするときの心配のひとつは、オデッセイというこの政策は、日本はどうかよく分からないんですけど、首長たちは自分のシンボリックな政策を建てたい、というふうな傾向があるんですね。

それで同じ、似てるような考えをする人たちでも、前の人がやったのと同じ単語を使ったり、同じ事業をやったりはあまりしません。自分の物をやりたい、というふうなことがあつて、オデッセイは誰が見ても、先程のあの人の物なんです。

これがかえって、この人がいるうちには安心感とかがあつたんですけど、この人がもし選挙でダメになったらどうする、ということも結構質問があつたんです。

それが、今年選挙があります。今年の6月に選挙があるから、もし私が今年か来年度にオデッセイの話をするときは、違う話をするかもしれないですけど（会場笑）。

とりあえず韓国の中では政策は変わるかもしれないけど、学校になれば、学校は教育の首長もあんまり手を出さない。文句を言わない。という傾向があるらしいんですね。よく分からないんですけど。

だから、学校に作りましょうということで、今年から、2018年度から各種学校。一つの政策じゃなくて、各種学校として作ったんです。それで各種学校を作るときみんな心配してたんですね。学校になれば私たちの言う通りにできるか。だから、そのため

に、それを解決策として外部から、そういうのをちゃんと持てていく校長を公募で選んで、それでやっていきましょうということになったんですけど、それが残念ながらできませんでした。

というのは、校長の選抜というか、それをするには教育部の認可をもらわないと、承認をもらわないとダメなんですけど、ソウル市から教育部に聞いてみたら、各種学校はできますが、このオデッセイは一年システムだから、一般の各種学校と違って、「校長は教育庁から発令されたほうが間違いないんです」というふうな話があって、今年から各種学校として始まったんですけど、私らの校長は、校長といっても、とりあえず民間協力ですよということで、校長はただの象徴みたいな、シンボルみたいなものとしてあるんですけど、彼はある学校の校長先生が兼任をしてるんです。一緒に私たちのところで校長としてやっております。それで揉めることも結構あるんじゃないかなという予想はするんですけど、でも、戦わずに、怒りを出さないで、我慢しながら（会場笑）、私たちが大事にするものを得ていきたいなと思ってます。長くなりました。これで終わります。

朝倉：どうもありがとうございました。

(終)